医科大学図書館における正規の授業と連携した情報リテラシー教育について

山下ユミ
京都府立医科大学附属図書館

１．望ましい情報リテラシー教育を実施している図書館へのインタビュー調査

2010 年の調査によれば、日本の大学の医学部医学科において、図書館が正規の授業と連携して情報リテラシー教育を実施している割合は半数程度であり、様々な問題を抱えていた。しかし中には、図書館が正規の授業と連携しつつ、積極的に情報リテラシー教育を実施している事例が見られた。そこで、望ましいと思われる情報リテラシー教育を実施している 4 大学の図書館にインタビュー調査を行い、共通点等を考察することとした。その結果、次のような共通点が見られた。1～2 年生に対しては、図書館案内や、蔵書検索データベース（OPAC）を用いた図書館内での資料の探し方を中心とする基礎的な内容を扱っていた。その後 3～4 年生の間に、PubMed、医中誌 Web 等の医学文献データベースを用いて雑誌論文を探す実習が取り入れられていた。EBM（Evidence Based Medicine,根拠に基づく医療）に関する情報リテラシー教育は、全ての大学で既存の授業と連携して実施しており、図書館は UpToDate 等の EBM ツールの使い方を教える役割を担っていた。また、高い出席率、継続的な実施といった特徴があった。

２．京都府立医科大学附属図書館における情報リテラシー教育実施と学習効果

インタビュー調査の結果を参考にして、京都府立医科大学附属図書館の 2014（平成 26）年度の情報リテラシー教育および学習効果測定のためのアンケートを設計した。その結果、ほぼ全てにおいて、既存の授業と連携して教員の協力を得ることができ、出席率は 90%以上を達成した。また、5 年生の授業と連携し、図書館による EBM ツールの説明と実習を開始した。

３．まとめ

既存の授業と連携して情報リテラシー教育を実施することにより、高い出席率を保持することができる。その一方で、教員との信頼関係を継続するためには、図書館側では教育プログラムの内容を充実させ、洗練させていくことが必要になる。大学によってカリキュラムをはじめとして、教員、教室等の環境、図書館員の持つスキル等が異なる。それぞれの大学図書館においては、これらの要因を考え併せながら、自館において取れる選択肢の中から、学生が情報リテラシーを身に付けるために最適の方法を考えて実行していただければと思う。

参考文献

山下ユミ．医科大学図書館の実施する授業等の実態調査．医学図書館．2013, 60(1), p.12-21.